掲載許可番号： d20230327-01

俳句の力で前向きに

松山東雲女子大卒業の坂本さん第１句集

本紙投稿入選作など100句

「読んだ人が前向きになれる俳句を作り続けたい」と話す坂本梨帆さん

松山東雲女子大を今春卒業した坂本梨帆さん(22)が第１句集「ひかりやさしく」を出版した。本紙の「集まれ俳句キッズ」や「青嵐俳談」などの入選作を中心に１００句をまとめた。傷ついた時に俳句で前を向くことができた自分のように「句集を手に取った人が少しでも前向きな気持ちになってくれたら」と願う。

坂本さんは大洲市長浜小学校５年の時、テレビの子ども向け俳句番組に参加するために俳句を始めた。長浜中学校では生活文化部の仲間と「集まれ俳句キッズ」に投稿した。感情や情景を五七五の言葉で表現する楽しさに夢中になった。

一方、高校の時には言葉の恐ろしさも味わった。俳句に関することも含めた悪口を交流サイトに一方的に書かれた。怒りの感情は起きず、ただただ怖かった。

だが、小学生から俳句を続け、言葉には正反対の力があるとも信じた。作品が新聞に載ると、近所の人や友達が「いい句だったよ」「出てたね」と喜んでくれる。ほんの少しかもしれないけど、俳句で人を元気づけられると感じていた。

「言葉は凶器にもなるし、人を癒やすこともできる。なら、うつむいていた人が少しでも顔を上げられるような句を作りたい。それぞれの言葉で対等に語り合いたい」

大学生になっても作句を続け、青嵐俳談は２０１８年のスタート時から毎週投稿を続ける。サークルの顧問に句集出版を勧められ「大学生なのに出していいのだろうか」とも悩んだが、「俳句を続けても、将来句集を出せるとは限らない。学生だからこそ挑戦しよう」と決めた。

生まれ育った長浜の風景を詠んだ「雲の峰老舗パン屋と赤い橋」や、俳人の坪内稔典さん（伊方町出身）がエッセーで紹介してくれた「秋の蝶そこに博物館がある」など思い入れの深い作品を選んだ。「円窓の光やさしく湯豆腐忌」「虹見つけ詠むことそれは生きること」など、一部には自分で解説文を書いた。

４月からは精神保健福祉士を目指し、専門学校で学ぶ。「みんなが生きやすい社会をつくることに貢献できれば」。俳句や短歌などを用いて患者の心を癒やす「詩歌療法」という治療があるという。小さい頃から向き合い続けてきた俳句の力を信じ、夢への一歩を踏み出す。

（高橋正剛）